

日本音楽学会東日本支部例会、2018年12月8日、国立音楽大学

ワークショップ

「音楽形式論再考：Caplin, Hepokoski, Webster を読む（演じる）」

【開催趣旨】（文責：伊東辰彦）

今回の例会は、2007年10月10－14日に、ドイツのフライブルクで行なわれた、第6回ヨーロッパ音楽分析会議（Euro-MAC）の *Formenlehre* に関するシンポジウムをまとめた書物である、Pieter Berge, ed., *Musical Form, Forms, Formenlehre: Three Methodological Reflections* (Leuven University Press, 2010) を題材として、ワークショップのスタイルで行いたいと思っています。シンポジウムに登場した3人の論者の主張を、平野（Berge）がまとめ役となり、沼口（Caplin）、石井（Hepokoski）、伊東（Webster）がそれぞれを代弁しながら、参加者全員と共に、この分野の現状を理解し、今後の課題に取り組みたいと考えています。書物の「前書き」（Ludwig Holtmeier）によれば、この会議全体では、180人の発表者と500人を超える参加者があったそうですが、その中でも、このシンポジウムは会議全体の核となるものであったようです。そのことは「前書き」にも述べられており、これまでの様々な、国ごとの、あるいは伝統ごとの枠組みを乗り越えて、真に国際的な、今後の世界的議論につながる内容であることが強調されています。日本では、残念ながら、このテーマでそれほどの参加者を集めることは難しいかもしれませんが、いみじくも、11月3日に開催された日本音楽学会全国大会の Session G（司会：伊東辰彦）に参加した若手の発表者たちの研究（Haydn, Mozart, Schubert に関するもの）の参考文献には、Caplin, Hepokoski らの研究が含まれており、今後、18－19世紀のヨーロッパの音楽を語る上で、無視できない分野であると思います。実際、海外においては、1990年代から着実に進展してきている分野であり、日本の研究者がその輪の中に参加する意味でも、これを機会に、日本の遅れを一気に縮め、学会としての理解を深めたいと思うのです。折しも、この分野のもう一人の雄であるマーク・エヴァン・ボンズの著作、『ソナタ形式の修辞学：古典派の音楽形式論（Wordless Rhetoric: Musical Form and the Metaphor of the Oration）』、（音楽之友社、2018年）が土田英三

郎氏の訳で上梓され、遅ればせながら、日本においても機が熟して来ているように思います。

予定としては、前半の第1部で、平野の前置きの後、沼口、伊東、石井の順でそれぞれが担当した論者の主張の要点をまとめることにします。休憩を挟んで、後半の第2部では、平野が司会役を務め、3人の論者が互いの主張に対して提示した質問や疑問を要約することにします。もちろん、例会の限られた時間内では、この書物に述べられていることの全てをお伝えすることはできないので、今回の3人の発表者がそれぞれに重要であると判断する点、面白いと感じる点を抜き出して、聴衆としての参加者の皆さんと共有し議論することになると思います。また、それぞれの発表者が自分の担当した部分についても個人的な意見や感想も、発表の中にできる限り含めたいと思っています。いずれも、我々にとってはよく知られているレパトリーが対象になっており、すでに多くのことが論じられてきた題材ではありますが、決して言い尽くされたわけではないことに気づくことが必要です。3人の論者の個々の議論の詳しい内容は例会の場に譲ることとして、この書物にまとめられたシンポジウムの重要な特徴は、それぞれが異なった方法論を展開し、お互いの違いを意識しつつ、それを踏まえて議論を深めている点だと思います。もちろん、建前としては、自分の考え方の正当性を主張し、相手の考え方の問題点を追及する訳ですが、究極の目的は、対象となる作品についてのより良い理解に到達することであり、お互いの考え方を単純に排除することではないことです。従って、読み手としての我々にとって重要なことは、特定の考え方や、提示された理論の全てを無批判に鵜呑みにするのではなく、批判的に受け止めることにより、かつての、シェンカー理論や大宮・ラルー理論に盲従する轍を踏むことのないようにすることだと思います。また、そうした過去の経験を経た今、私たちの理解力自体も十分に成熟してきていると思うのです。もちろん、この書物が提起していることの全てを理解するためには、参加者のそれぞれが時間をかけて精読する必要がありますが、今回の例会がそのひとつのきっかけとなれば幸いです。その意味で、あえてワークショップという呼び名にしました。なお、この企画を、音楽学会の例会の活性化に人一倍尽力され、またこの分野への関心が大変高かった、故森泰彦氏に捧げたいと思います。